

旅行者たちが創ったスペイン・イメージをめぐって —アンダルシア神話の生成と持続—

岡 住 正 秀

はじめに

19世紀前半のロマン主義は、ヨーロッパによるスペインの「発見」をもたらした。西欧世界で今もなお観光業とも結びつくスペイン・イメージは、ヨーロッパ・ロマン主義の商標付きでスペインに輸入された概念に符合している。それ以前の「黒い伝説」に塗られたスペイン・イメージは、ある程度更新されるか修正された。近代史家ホベールが指摘したように、「タンバリンのスペイン」が、フェリーペ2世の、異端審問所のカスティーリャのスペインにとって代わった。このとき新たに発見された「スペイン」のなかで、アラブの過去の痕跡をとどめる南スペイン、すなわちアンダルシアに卓越した地位が付与されることになる⁽¹⁾。このアンダルシアの利用とその数々のトピックステレオタイプなスペイン・イメージ形成の源泉—は、スペインでも外国でも事実であり、研究者たちが一様に認めるところである。

アンダルシアとスペインの同一視について、フランスのスペイン史家ブノワ・ペリストランディは、スペイン政治史との絡みでフランスにおける20世紀スペイン・イメージを考察するに際し、フランス人による真の現実の知覚にもましてロマン主義が遺した紋切型の語りがいかにデフォルメ効果を及ぼしてきたかを指摘する。ペリストランディによれば、1875年ビゼーのオペラ「カルメン」がトピックに満たされたロマンチック・スペイン観を不朽のものとし、メリメの小説（1845年）を越えてその後のフランスにおける^{エスパニョリスモ}スペイン趣味の前景を占めながら、フランス人の集合心性に深く刻み込まれる⁽²⁾。その「カルメン」は、とくに19世紀前半の旅行記が生み出した数々のトピックにその根をもっている。

1820年代後半から1850年にかけて、西欧諸国、とくにフランスとイギリスでスペイン旅行が一大ブームとなった。先行の旅行者が綴ったスペイン体験に魅了され、多くの旅行者がスペインを訪れた。イギリスやフランスの音楽、舞踊、美術などの分野で沸き起こったスペイン趣味と时期的に重なり、紀行文学が人気のジャンルとなった時代である。19世紀後半に入っても、ロマンチックなスペイン・イメージは拡大再生産され、アンダルシアのスペインのステレオタイプが持続することになる。

ところで、スペインでは1980年代から最近に至るまで、19世紀に書かれた旅行記のスペイン語版

や選集が逐次刊行され、ヨーロッパによるスペインの発見の歴史に接近可能になった。外部で創られたスペイン・イメージは、マヌエル・ベルナル・ロドリゲスが指摘するように、「現実を歪曲した表層的な」スペインあるいはアンダルシアにすぎない⁽³⁾が、当のスペイン人にも様々な形で受容され内面化されたようだ⁽⁴⁾。

本稿では「ロマン主義旅行者」たちが創造したスペイン・イメージ、とくにアンダルシア神話に焦点を絞って、その中身を明らかにしたい。この課題については、早い時期からベルナルの一連の仕事を皮切りに、多くの研究が蓄積され、近年では文学や地理学の分野での研究も進展している⁽⁵⁾。しかしわが国では多く語られるはするが、ほぼ未開拓のテーマである。こうした事情を考慮すれば、本稿はスペインにおける研究成果に沿ったやや包括的な考察とならざるを得ないが、スペイン・イメージ形成に決定的な影響を及ぼした主要な旅行記を中心に、ほぼすべての旅行者たちが決まっていた「オリエンタ的」—厳密に言えばアラブ的・アフリカ的—をカギに定義されるスペインに焦点を当てて省察することにする。最後に、外部で観察されたスペイン・イメージがスペイン国内でどのように受容されたのかも考察してみたい。

第1章 スペイン・イメージの変化、啓蒙の旅行からロマン主義的旅行へ

18世紀のスペイン・イメージ

黄金世紀のスペインは、政治的・文化的にヨーロッパでヘゲモニーを確立した時代だった。カルロス5世の時代に起きた対抗宗教改革や隣国フランスとの対立をへて、フェリーペ2世の時代にはエリザベス1世のイギリスとの対立、その帰結としての無敵艦隊の敗北（1588年）、さらにオランダ独立戦争やフランスとの対立抗争でヨーロッパ大陸でのヘゲモニーを失墜する17世紀末にかけて、スペインはヨーロッパ諸国とその時々の政治的利害を起点に定義された。いわゆる「黒い伝説」（フリアン・フデリアが1913年に発明した用語）はそうした相互対立関係の表れに他ならない⁽¹⁾。

ヨーロッパ大陸でフランスの文化・文明が拡大した18世紀は、啓蒙の時代でもある。偉大な哲学者たち、とくにヴォルテールとモンテスキューおよび百科全書派が絶大な影響を及ぼした。ヴォルテールはスペインの異端審問所を引き合いに出し、その狂信的カトリシズムを痛烈に批判した。モンテスキューも『ペルシャ人の手紙』（1721年）のなかで異端審問的雰囲気に対応したスペイン人を揶揄した。そしてマソン・ド・モルヴィリエは『方法百科』（1782年）の「スペイン」の項目を執筆し、スペイン人の国民感情に痛烈なとどめの一撃を加える。「啓蒙の光」に背を向けて迷信、宗教的狂信主義、残忍性を特徴とするスペイン・イメージを提示した⁽²⁾。とくに二人の哲学者の託宣のおかげで、フランスではピレーネの南の隣国はいまだ中世的な闇の中に沈み、異端審問所の公開処刑を見世物として好む国民だと見なされていた⁽³⁾。18世紀のフランスでは哲学者たちがスペイ

ン・イメージを創ったのだ。スペインの啓蒙改革家たちは「黒い伝説」を払しょくできなかつた。

しかしネガティブなイメージの縁で、18世紀末のヨーロッパには、とくに古典文学を通じて新しいスペイン・イメージも流布していた。セルバンテス、劇作家のカルデロンやロペ・デ・ベガをはじめ、モリスコ小説、辺境のロマンセ、そしてピカレスク小説は、フランス文学の世界でなじみのジャンルになっていた⁽⁴⁾。ベルナルル・ロドリゲスは、こうした文学的なスペイン・イメージのなかに、アンダルシアの要素が潜在していたことを強調する。セルバンテス、ケベード、その他の作家たちが特定の習慣や人物を描く際に舞台をアンダルシア、とりわけ「民衆的な」セビーリャに設定していたからだ⁽⁵⁾。他方、19世紀初頭のフランス文学史においては、謹厳さと陽気さ、怠惰と気力、名誉心と快楽欲、ドン・キ・ホーテとサンチョ・パンサといった矛盾対立項に、舞踊、ギター、ジプシー、葉巻などの地方色が加味された「スペイン神話」が形成されていたという⁽⁶⁾。

啓蒙の旅行から新しい感性の誕生

ところで、18世紀は「グラン・ツール」の時代でもある。イギリス・ドイツ・スイス・低地諸国からフランス・イタリア半島へ、すなわちヨーロッパの北から南への旅行ブームが起きた。スペインは当初、このグラン・ツールのサーキットから外れていた。「啓蒙の旅行者」たちは合理主義の規範に合致しないものを批判し、「進歩」と「文明」の模範となりうる有用な情報を得ることが主たる関心事だったからである。当然スペインは「ジェントルマン・ツアー」（成人への通過儀礼）の旅程にも含まれていない。

しかし18世紀後半にカルロス3世の啓蒙改革期を迎え、第3回のフランスとの「家族協定」が結ばれると、フランスの旅行者が次第に増えていく。フランスの外交官ファン・F・ペイロンは、1772年から73年にスペインを旅した。同じく外交官のブルゴワンも1777年から85年までスペインに滞在して、スペイン社会を詳細に観察している。同じ時期、イギリスからもヘンリー・スウィバーンが1775年にスペインを周遊し、冷静かつ公平な旅行記を残した。最も優れた旅行記を著したのは、1786年にスペイン中をくまなく巡り歩いたイギリス人タウンゼントだろう。彼の旅行記はスペインの地勢を知るうえで貴重で有用だったため、ナポレオン軍によるイベリア半島侵攻時に、そのフランス語版を指揮官たちが携帯したという⁽⁷⁾。啓蒙の旅行者たちの旅は、公的な性格を帯びた視察旅行に近いものだった。彼らの旅行記は基本的に進歩と文明を尺度に、当時のスペインの国情、すなわち農業や経済事情、公共事業、人々の習慣、異端審問所を含めた行政機構などにほぼ全ページを割いている⁽⁸⁾。

しかしワシントン・アーヴィング以前に、上記の4人の旅行者たちがグラナダの魅力を書き記したことは注目されよう。彼らは一様に、緑で覆われたグラナダのベガの美しさと農作物の多様性を称賛した。タウンゼントはその沃野一帯を「地上の楽園」と呼び、スウィバーンはアルハンブラ宮

殿に驚嘆して「おとぎの国」にたとえた⁽⁹⁾。グラナダはヨーロッパにとって未知の都市だったのである。「グラナダはスペインの都市である」と断わったうえで、ペイロンはそこには「モーロ人たちが多くの建造物を遺している。かの民族はグラナダを自分たちの宗教、風俗・習慣、そして壮麗さをつめこんだ貯蔵庫にしたいと願ったのだ」⁽¹⁰⁾と述べた。ブルゴワンはペイロンの情報に基づいて、廃墟のなかにアラブ様式の壮麗な建造物がそっくり残されている古都グラナダを紹介した⁽¹¹⁾。

新しいイメージが誕生しようとしていた。文人ベックフォードによる『バテック―アラビア物語』(1782年フランス語版、86年英語版)以来、イギリス人はオリエントへの道の途中で出会ったスペインの文化のなかに「ムーア・スタイル」を発見する⁽¹²⁾。『チャイルド・ハロルドの巡礼』(1812-1818年)を著したバイロン卿は、アンダルシアでモリスコ的・アフリカの響きを聴く⁽¹³⁾。フランスの初期ロマン主義の波を受けて保守主義と熱烈なカトリシズムを信奉するシャトーブリアンは、『パリからエルサレムへの旅』(1811年)で知られるが、1807年にエルサレムからの帰路、アンダルシアに立ち寄って『最後のアベンセラーフェの冒険』(1826年)を著している。フランス・ロマン主義のもう一人の偉大な人物で自由主義的なヴィクトル・ユゴーも、「オリエントの通路」「未知なる国」スペインにインスピレーションを受けて『東洋詩集』(1829年)を発表した。ヨーロッパの内なる「オリエント」としてのスペインの発見である。18世紀末から19世紀初頭のヨーロッパでは、明らかに漠然としたロマンチックな相貌をもつ「オリエント的」スペインが知覚されていたのである。

ロマン主義の対象となるスペイン

決定的な契機は、1808年に始まるスペイン独立戦争(～1814年)である。深い衰退と昏睡状態にあったスペインの民衆が示した活力と情熱は、まさに民衆的ロマン主義の表現である。たしかに、フランスの兵士たちには、ゲリラ、僧侶、民衆による行動がスペイン人の残虐性をあらためて想起させたが、ナポレオン軍に対して戦ったスペイン民衆の祖国愛は、ヨーロッパ中で称賛されたのである。この出来事は、ナポレオンが擁護するフランスのヘゲモニーに対する三つの国民解放戦争のさきがけをなし、ロシアの祖国のための戦争(1812年)、ドイツの民族解放戦争(1813年)がそれに続く。こうしてスペインは決定的にロマンチックな国になる。ナポレオンのヨーロッパという均一化、合理主義と古典主義に対する国民的個性(民族性)の発露と見なされたからだ⁽¹⁴⁾。

スペインのヨーロッパ舞台への登場を契機に、スペイン南部のアンダルシアは、19世紀最初の数十年間のスペイン政治のあらゆるレベルで主役的な座を占める。スペイン全土がナポレオン軍に制圧されるなか、フランス軍の攻撃に耐え抜いたカディスで最初の近代的スペイン議会が召集され、自由主義的な1812年憲法が制定された。1814年にフェルナンド7世の絶対王政が復活するが、1820年にリエゴ大佐がプロヌンシアミエント(軍事蜂起)を決行したのは、カディス近郊のカベサ・

デ・サンファンである。ウィーン反動体制のもとで「立憲主義の3年」(1820—1823年)を迎えると、ふたたびスペインに熱い視線が注がれた。しかし1823年に神聖同盟列強が派遣した「聖ルイの10万人の息子たち」がスペインに侵攻すると、ふたたび絶対王政が復活した。この一連の出来事を契機に、自由主義的フランスにとってスペインは称賛すべき国となる。神聖同盟のもとの反動的ヨーロッパに対して自由主義者たちが果敢に挑んだ唯一の国だったからだ。他方、保守主義的フランスは、ある種の家父長主義的な眼差しをスペインに向けた。急進的な自由主義からスペイン民衆の伝統的価値を守ろうとした。結局、エチェバリーア・ペレーダが述べるように、1823年のフランス軍派遣は、両国の「和解」の道筋をつけることになる⁽¹⁵⁾。

ところで、独立戦争は大勢の外国人のスペイン滞在や大規模な人の移動を伴った。ナポレオン軍の兵士やウエリントン公指揮下のイギリス軍兵士たちは、じかにスペインを体験する。他方、ナポレオンが押し付けた傀儡国王である兄ホセ・ボナパルトを支持した親仏派^{アフランセサド}の家族約1万人は、フランスへの避難を余儀なくされ、そのほとんどは帰国することなくフランスに永住することになる⁽¹⁶⁾。これと同じような現象は、1823年にフェルナンド7世の専制が復活したときに起きた。大勢の自由主義者たちが祖国を後にして、フランスやイギリスに赴いた。この政治亡命は、1830年代後半から43年まで自由主義勢力の分裂後の政権交代の度に起きるが、文化ツーリズムの性格を帯びていた。とくにフランス・スペイン両国の歴史のなかで、初めて直接的に人々の濃密な接触と交流をもたらし、より深い相互理解が促進されるのである⁽¹⁷⁾。

旅行のはじまり

スペインは何も変化していない。独立戦争後のフェルナンド7世の時代、ラテンアメリカ諸国は独立し、スペイン経済は完全に麻痺状態に陥り、いかなる近代的改革への機運も途切れていた。急速に産業革命を経験して近代化が進行するヨーロッパにあって、ロマン主義者たちは自分たちの国とは異なるスペインにエキゾチズムを強く感じた。衰退したスペインには、新たなタイプの旅行者の出身国とはコントラストをなす世界があるからだ。スペインの後進性、それまで忌み嫌われたものが、今になって魅力的なものと評価される。

アンダルシアはスペインのすべての地域のなかで、ロマンチック旅行者の好みの場所だった。フランス人よりも先にスペインを訪れたのはイギリス人である。彼らのロマンチックな親モーロ^{マウロフイリア}的態度は、スペイン南部のアンダルシアをまさにスペイン的な地方に転換し、この地に大勢のイギリス人旅行者を引きつける⁽¹⁸⁾。イギリス人にとってジブラルタルが格好の上陸地だった。かの地に駐留する冒険好きの若手将校たちが、カディス・マラガ山岳地域にしばしば遠出し、ロンダからアンテケーラを経由して「ロマン主義の聖地」グラナダへのルートを開拓していた。まさに密輸業者のルートであり山賊の跋扈する地域でもある。往路はしばしばマラガを経由し、最後にカ

デイスかジブラルタルで終わる。この二つの都市にはイギリス領事官が置かれており、領事たちが同胞の旅行者を歓待した。カデイスやマラガの街区の広場や海外食糧品店には、いつでもイギリス人の姿があったという⁽⁹⁾。イギリス人旅行者のなかには、リチャード・フォード（1830年）、ジョージ・ボロウ（1836年）、マレー（1843年）、画家のデヴィッド・ロバート（1832-33年）などがある。

フランス人旅行者については、1830年以前となると、例外的にヴィアルドット、テイラー男爵、シャトブリアンらがいるが、ロマン主義的旅行者が増加するのはそれ以後である。プロスペリ・メリメ（1830、1831、1840、1846年）、ドラクロア（1832年）、スタンダール（1837年）、テオフィル・ゴーチェ（1840年）、ヴィクトル・ユゴー（1843年）、エドガ・キネ（1843年）、アレキサンドロ・ジュマ（父：1846年）、ダヴィリエ男爵と画家のギュスターヴォ・ドレ（1862年）。そして19世紀後半になると、画家のマネ（1868年）やルノワール（フォルトゥニーの友人で賛美者）が続く⁽²⁰⁾。

第2章 ロマン主義的旅行者、南に誘われる

概してロマン主義的旅行者たちは、上流階級の貴族やエリート層が多数を占める一方、19世紀半ばになると有閑階級の女性たちもスペインを訪れている。また旅行者たちは、権力筋の近くに位置し、政治的には保守主義的な人々である。しかし優れた旅行記を残したのは作家や芸術家たちである。以下では、スペイン・イメージ形成において決定的な役割を果たした旅行者たちを紹介しよう。

旅行者たちのプロフィール

アメリカ合衆国の作家にして外交官のワシントン・アーヴィング（1783-1859年）は、1829年にマドリードからセビーリヤ経由で、グラナダ巡礼に向かう。彼はアルハンブラ宮殿内の滞在許可を得て、ここに1年過ごした。1832年に『アルハンブラ物語』をロンドンとフィラデルフィアで出版して「オリエントの美的趣味と壮麗さの一大記念碑」を世界中に知らしめた。フランス語版も1年後に出版され、世界でもっとも広く知られた作品である⁽¹⁾。全編に極端なまで親モーロ的^{マウロフィリア}態度⁽²⁾が貫かれ、ナスル朝イスラームの王たちの逸話や宮殿にまつわる伝説や伝承の数々が織り込まれている。イスラームの平和な統治のもとで文化は高度に洗練され、陰に沈む中世ヨーロッパとは対照的に、幸せな楽園がナスル朝グラナダ王国に存在したという。19世紀のアンダルシアにアル・アンダルス（中世イスラーム統治下の領域）の子孫たちを発見できるという確信すらうかがえるが、「モリスコのアンダルシア」は、北ヨーロッパのロマン主義に特有の歴史主義の所産である。アベリッチは「オリエント的スペイン」像の流布をアーヴィングに帰している。「近代のキリスト教徒のスペイン人は、生物学的にも文化的にも中世のモーロ人の直接の子孫であるという信仰は、当のスペイン人があえて反論もしないロマン主義的信仰箇条だった」⁽³⁾。

リチャード・フォード（1796–1858年）は1830年にセビーリャを訪れ、3年間のセビーリャ滞在中に、マホの衣裳⁽⁴⁾でスペイン各地をくまなく巡り歩いた。「半島戦争」（イギリス人にとってのスペイン独立戦争）でスペインを支援したウエリントン公の紹介状によってアマリーヤ公爵（2年後にアンダルシア軍総督に任命される）の厚遇を受け、セビーリャ上流社会との交流もあった。セビーリャ滞在中、演劇やマエストランサ闘牛場にしばしば通うかわらアンダルシア舞踊を愛好した。

彼の著作はイギリス帰国後10年以上経過して出版された。『スペイン旅行者のためのハンドブック』（1845年）と『スペインの事物』（1846年）がそれであり、当初から高い評価を受けてイギリスおよび英語圏で広く読み継がれた⁽⁵⁾。後者の『スペインの事物』は地形の説明から始まり、旅行、ラバ追い、旅籠、山賊、衣服、料理やワイン、闘牛、娯楽、さらに当時のスペインの風俗・習慣にまで広範に及び、辛口のスペイン批評も盛り込まれて興味深い内容となっている⁽⁶⁾。

フォードがスペインを後にして3年、ジョージ・ボロウ（1803–1881年）はポルトガルからスペインに入った。ボロウはイギリスの下級軍人家庭に生まれ、必ずしも純粋なロマン主義旅行者ではない。イギリス聖書協会から派遣された彼は、新約聖書普及のための販売網確立のためにスペインを周遊する。ジプシーに深い共感を寄せたボロウは『ジンカリースペインのジプシーについて』（1842年）と旅行記『スペインの聖書』（1843年）を残した⁽⁷⁾。その他のイギリスの旅行者として、1843年にスペインを訪れて『アンダルシアの都市と荒野』（1849年）で知られるロバート・マレー、数多くのスケッチを残した画家デイヴィッド・ロバートがいる。この画家は、異なるスペインの典型として闘牛士や山賊のほかに、カトリックの僧侶、とくに修道僧を画材に選んだ。イギリスの公衆にはエキゾチックで魅惑的だったようだ⁽⁸⁾。

スペイン・イメージのステレオタイプあるいはスペイン神話の創造という意味では、フランスの関与が質量ともに決定的である⁽⁹⁾。イギリスの旅行者たちの作品が旅行記であるのに対し、フランスの旅行者のそれは紀行文学と呼ぶにふさわしい。旅行者たちはシャトーブリアン以来、詩人のミュッセやヴィクトル・ユゴーといった文学者たちによってスペインに誘われた。

プロスペル・メリメ（1803–1870年）は1830年にスペインを訪れ、スペイン各地を6ヵ月間放浪した。彼は事前に十分な情報を収集し、カスティール語を習得していた。メリメは旅行記を書いていないが、旅の途中でフランスとスペインの友人たちに宛てた書簡あるいは帰国直後『パリ評論』に寄稿した『スペイン便り』⁽¹⁰⁾を残している。メリメは心理的に下層民に共感をもち、山賊と思しき人物や囚人もふくめて様々な下層民と接触をもった。1830年9月初旬、マドリッドからコルドバに立ち寄ってグアダルキビル河にかかるローマ橋に目を奪われた。セビーリャからカディス、アルヘシラスへと旅をつづけ、密輸業者と山賊のルートをたどりながらグラナダへ向かう。メリメはこの旅の体験に基づいて、自ら織りなすタピストリー—『カルメン』—にスペイン神話のための

ステレオタイプを体現する人物像を発見する。闘牛士、僧侶、囚人、山賊、女占い師、ジプシー、とくにジプシー女性である。これらは旅行者たちを魅了し、詩にも歌われる馴染みの人物類型である⁽¹¹⁾。

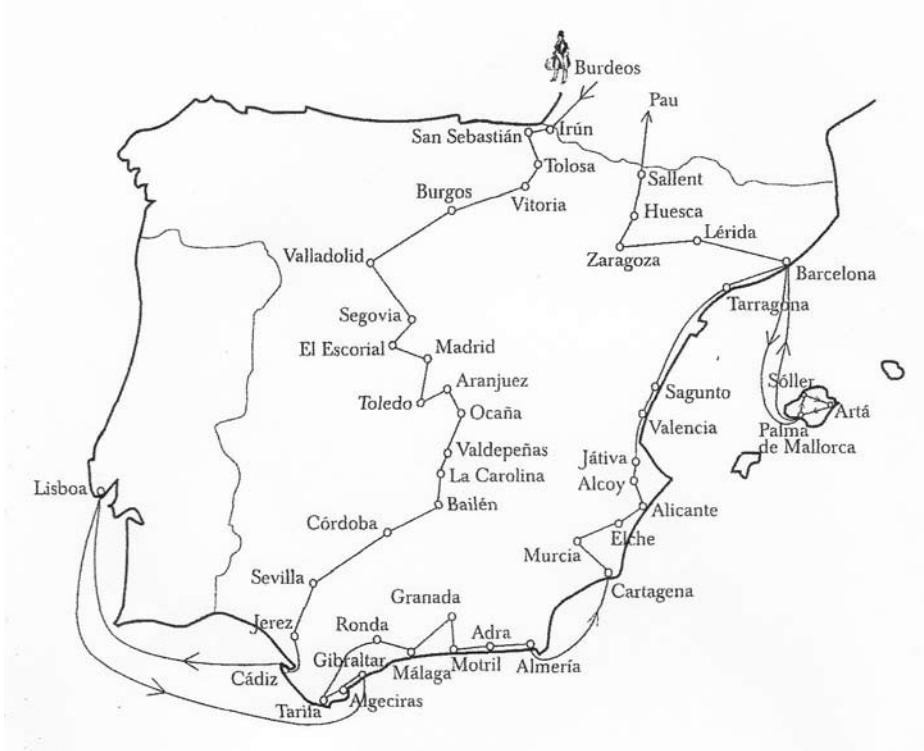
テオフィル・ゴーチェ（1811-1872年）がスペインを訪れたのは1840年初夏、スペイン北部が舞台となったカルリスタ戦争（1833-1839年）の終結直後のことである。彼はフランスにおけるエスパニョリスモ（スペイン趣味）の熱情が頂点に達したときに作家生活を始めた。バイヨンヌから乗合馬車でスペインに入る直前、ゴーチェは次のように述べている。「車輪があと何回かまわれば、ぼくはおそらく自分が抱いてきた幻想の一つを失うだろう。ぼくの夢に現われたスペイン、ロマンセーロ（小叙事詩集）、ヴィクトル・ユゴーのバラッド、メリメの小説やアルフレッド・ド・ミュッセの物語などに歌われたスペインが消え去っていくのを見ることになるだろう」⁽¹²⁾。この予感はずばりだが、彼の思い描く文学的スペイン、アンダルシアへの幻想は砕かれることはなかった。1845年にパリで出版された『スペイン紀行』は文学的色彩の強い示唆に富んだ、まさにスペイン紀行文学の頂点をなしている。ゴーチェはピントレスクな南国スペインの光が織りなす風景、習慣、美術をもっとも正確に観察したロマン主義者の一人である。スペイン美術の現状にも注目し、ゴヤ神話の伝播に貢献した。

ところで、ゴーチェは帰国後に作家シランダンと共同で三幕のヴォードヴィル《スペイン紀行》を制作している。この作品は、パリのバリエテ劇場で1843年9月から10月にかけて31回の上演を記録し、スペイン趣味の熱情が高揚するパリで大好評を博した。ちなみに、この年は1年を通じて、ボレロ流派のスペイン舞踊団がバリエテ劇場やシルク劇場で公演し、パリの公衆に官能的なスペイン舞踊の魅力を存分にアピールした。同時にヨーロッパ・バレエ界にジプシー趣味が採り入れられる時期である⁽¹³⁾。舞踊に精通するゴーチェは批評家としても活躍し、パリにおけるスペイン趣味に貢献するのである。

ゴーチェの最初のスペイン旅行から9年後、おそらくフランス人女性としては初めて単独でスペイン周遊を敢行した女性がいる。かつてゴーチェはスペイン旅行の危険を語っている。「旅の楽しみは障害と疲労であり、時には危険そのものでさえある」。「スペイン旅行はまだ危険でロマンチックな企てだ。勇気と忍耐力と活力が必要だし、労をいとわない覚悟が必要だ」⁽¹⁴⁾と。勇敢な女性はジョセフィーネ・ブリンクマン（1808-?）。1849年10月、山賊や盗賊との遭遇に備えて旅行カバンには拳銃2挺を携え、バイヨンヌからイルンに入って、約10ヵ月でゴーチェとほぼ同じ旅程で夢に見たスペインを周遊した。彼女の紀行記『スペイン散策』（1852年）には、スペイン人の歓待精神へ心から謝意が表明され、同時に1852年の起きた忌まわしいイサベル2世暗殺未遂事件に心を痛めて「高貴な国スペイン」への賛辞が送られている⁽¹⁵⁾。

最後にダヴィリエ男爵の旅について触れよう。ダヴィリエ（1823-1883年）にとっては10回目の

旅行者たちが創ったスペイン・イメージをめぐる
—アンダルシア神話の生成と持続—



ジョセフィーヌ・ブリンクマンの旅程

出典：Brinckmann, Josephine de, *Paseos por España (1849-1850)*, Madrid, Ed. Cátedra, p. 64.

スペイン旅行となる1862年の旅は、当時有名になった版画家ギュスターヴォ・ドレ（1832–1883年）が同行した。1860年代になると、スペイン旅行の関心はすでに薄れており、ある意味で二人の旅行は例外的なものだった。この時期、旅行者たちはイベリア半島を移動するのにラバや快適ではない乗合馬車を利用する必要もない。鉄道が敷設されていた。数十年前に旅行者たちが描いたスペインは、過去のものになろうとしていた。彼ら二人は後世に「良き」スペイン・イメージを残すため、失われる寸前の「スペインの事物」の目録作りを計画する。彼らの見聞は、パリ発行の雑誌『世界旅行』（1862–1873年）に挿絵入りで連載され、1875年に『スペイン』が出版された⁽⁶⁾。それが予想を超える絶大な評価を博したのは、ドレの挿絵（白黒の版画）が高く評価されたからである。ドレが追い求めた民衆的で生粋の風俗描写的世界は、鉛筆と絵筆の芸術家たちが引き継ぐことになる⁽⁷⁾。

彼らの旅行記はテーマ別に構成され、主だったアンダルシア諸都市での見聞の他に、新しい魅力的な要素としてセビーリャの祝祭（セマーナ・サンタ、4月の春祭り、ロメリーアなど）、スペイ

ン舞踊の各章に加えてロマンセと山賊、サクロモンテとアルバイシン、シエラ・モレーナの各章もあり、いわば「スペインの事物」の集大成とも言える。叙述はゴーチェのような個人的感情や印象にかけるが、ドレの数々の版画が想像をかきたててくれる。

ピントレスクな南へ

スペインは（他のヨーロッパの国々とは）異なる。20世紀に入っても観光業で繰り返し使われてきこのお決まりの文句は、ジュマ（父）に始まるようだ。「スペインはヨーロッパではない」「アフリカはピレーネに始まる」⁽⁹⁾。フランスの歴史家たちもスペインを語る時、この決まり文句を繰り返してきた。スペインはどのように見られたのだろうか。旅行者たちが共通に実感したのは、スペインの地域的多様性である。フォードは述べている。「スペインという国は地図上とてもコンパクトに見えるが、様々な異なる地方からなり、それぞれが過去に独立した王国を形成していた。今日でも地理的・社会的にももとの違いが、変わることなく残っている」。スペインの歴史にかなり精通するフォードは、近世において「スペイン王」は存在せず、実際は「エスパーニャスの王」だったと説き、スペイン人—正確には為政者たち—の統治能力の無さを批判した⁽¹⁰⁾。ゴーチェは「モザイク」のスペインについて語り、同じカスティーリャですら新・旧二つのカスティーリャの違いを指摘して、「単一のスペインは存在しない。複数のスペインが存在する」と述べている⁽¹¹⁾。

ところで、一般的にイギリス人旅行者はジブラルタルを起点としたが、フランスからのルートはピレーネ山脈の国境の二つの町からスペイン領に入る。ひとつはビダソア、もう一つはイルンである。大半の旅行者がマドリードを目指した。途中でビトリア、ブルゴス、バリャドリードを通して様々な歴史的建造物を訪れているが、北部のナバーラやガリシアなどには特別の関心は注がれない。マドリードでは特定の間人類型（たとえばマノーラ：粋な下町娘）、カフェ、闘牛場、ブラドの遊歩道など、活気あふれる雰囲気に関心が向かうが、唯一感動を与えたのはブラド美術館だった。旅行者たちが観察したマドリードは、すでに近代化の途上にあつた。ゴーチェはマドリード滞在中にゴヤを発見し、嘆息の言葉を残している。「ゴヤの墓には古いスペイン芸術が葬られ、闘牛士、伊達男、^{マホ}マ^{マノラ}、僧侶、密輸業者、盗賊、警吏、魔女たちの世界、イベリア半島の地方色がすっかり永久に消えてしまったのだ」⁽¹²⁾。

マドリードで多少の幻滅と失望を味わったあと、旅行者たちは期待感を膨らませながら南に向かう。ゴーチェは言う。「ぼくらはひたすらオレンジの木、レモンの木、アンダルシアの踊り、カスターネット、バスキヌや人目を引く民族衣装だけを夢見ていた。・・・みんながぼくらにアンダルシアのことを見事に吹聴したからだ」。「オリエント」の刻印を押されたアンダルシアは、特別な地域であるはずである。他のどの地域よりもモーロ的な条件を、際立ったエキゾチズムとイスラーム文明の痕跡をとどめているからだ。そして数日後、シエラ・モレーナを見たゴーチェは叫んだ。「こ

の山脈の後ろにぼくらが夢見た楽園が隠されている」⁽²²⁾。多くの旅行者にとってスペインはコントラストの国である。それは二つの極、すなわち北のカスティーリャと南のアンダルシアのコントラスト。しばしばアンダルシアは、カスティーリャに対置されて定義される。フォードはアンダルシアを後にするとき、次のように叫んでいる。「さらば、陽気なアンダルシア、南国の植物たちよ。北に向かうものは楽園を砂漠に変えるのだ」⁽²³⁾。熱烈な反カトリック的立場のボロウでさえ、活気あふれるセビーリャの魅力を次のように語ったことがある。「ここには楽しい生活が、そして夢がある。光と影、噴水と花々が織りなす夢」⁽²⁴⁾。さらにクエンディア(フランスに亡命したカスティーリャ出身の文筆家)は述べている。シエラ・モレーナという「この障壁はスペインとアンダルシアを分けている。この土地こそ神が与えた土地だとアンダルシアの人々が言うのも道理である。なぜなら、われわれカスティーリャ人の誇りがどうであれ、アンダルシアに比べると、二つのカスティーリャ、ラ・マンチャやその他の北部地域は何であろうか」⁽²⁵⁾。



オレンジのパティオ、ヒラルダと大聖堂 (作者不詳：1841年、セビーリャ)

出典：Clavijo Provencio, R., *Viajeros apasionados. Testimonios extranjeros sobre la provincia de Cádiz*, Diputación Provincial de Cádiz, 1997, p. 26.

アンダルシアの自然景観の美を称賛する証言は、実に豊富に存在する。「驚異的」「天国」「夢」「約束の地」。すべての旅行者は、自然景観—とくに険しい山岳地帯—のピントレスク(絵画にいつまでも固定化するにふさわしい美しさ)さに満足した。地理学者ロペス・オンティベロスは、旅行者が知覚するアンダルシア理解をまとめている。まず、シエラ・モレーナの峠、デスデニャペーロスがアンダルシアへの美学的・感覚的な入口となり、南に広がるアンダルシア全体が「楽園」として

イメージされる。これに、親モーロ的態度とアラブ的歴史主義が加味され、歴史建造物はもちろんのこと、あらゆる風景のなかにイスラームの繁栄とその後のスペインの没落と衰退に関する解釈がなされる。最後に、ロマン主義的感性による都市景観を含めた風景の発見⁽²⁶⁾、である。

他方、ゴンサレス・トゥロヤーノは、旅行者を魅了するアンダルシアの「多形態性」を指摘する。アンダルシアの環境は、その文化的混淆と分節化、その地理学的異質性（平野と山岳）、被征服諸民族と征服民族の間の多様な混淆と歴史の重層を内に秘め、ひとつの豊かな情景を提示してくれる。それは、探し求められた夢物語のモチーフとなりうるに十分な痕跡と参照を有している。古代ローマの遺跡、崩れかけたアラブの城塞や歴史的建造物は、個々の旅行者の主観が要求するものに依じて、古代、中世世界、とくに一つの芸術的・文学的オリエントの再生を可能にしてくれる。ア



コマレスの塔（アルハンブラ宮殿）

出典：Doré, Gustave, *Doré's Spain. All 237 Illustrations from Spain*, New York, Dover Publications, INC, 2004.
(以下Doré's Spainと略記)

ル・アンダルスの痕跡は厳然と旅行者の視覚に入り込んでくる。しかもはるか遠くのオリエントでなく、長い移動の不便さもなければ危険にさらされることのない、ヨーロッパの内なる「オリエント」がスペインに存在する^[7]。こうして、個々の旅行者の刺激や動機があまりにも主観的な性質を帯びるにもかかわらず、異なる主観とアンダルシアが提示しうるものと一致が起こるのである^[8]。

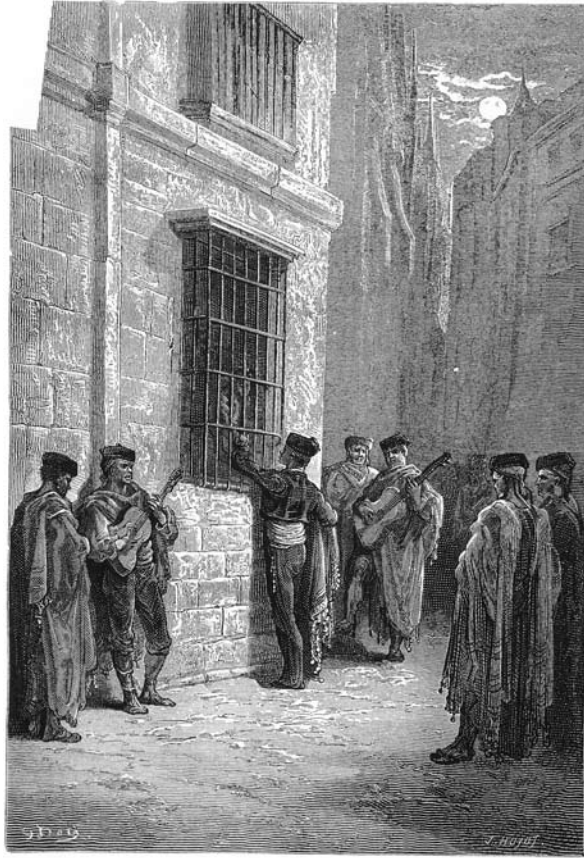
第3章 アンダルシアの多形態性、そして神話化へ

アフリカ的な気候条件を想起させる自然景観は、旅行者たちが作るアンダルシアの決まり文句にかなりの影響を及ぼしたが、歴史的都市はより一層の驚きと魅力を開示する。アラブの過去を濃厚にとどめる都市街区、そのオリエント的、すなわちアラブ的・アフリカの様相こそが、旅行者を魅了する最初の刺激だった^[1]。そして都市街区を散策すれば、必然的に人々の日々の営為のなかに垣間見られる独特の習慣や風俗にも視線が向かう。

アラブ的なものへの愛着

フォードがアンダルシアを語る時「モーロのアンダルシア」^[2]という。アーヴィングと同様にその親モーロ的^{マウロフイリア}態度から、当然、旅行者たちの必見の都市はヒラルダ、黄金の塔、ドン・ペドロの建立したアルカサルがあるセビーリヤ、メスキータ（巨大モスク）のコルドバ、そしてロマンチックなオリエントの普遍的シンボルとしてのアルハンブラ宮殿のグラナダである。ロンダ、マラガ、カディス、ヘレスなどがそれに続く。その他にアンダルシアの小都市には、廃墟のなかにアラブの城塞の跡が残されていた。旅行記のなかでは、歴史的建造物—もちろんセビーリヤの大聖堂やその他のキリスト教徒のスペインが遺したものも含め—から、活気あふれる街路と広場、旅籠^{ボサダ}、パティオ、窓辺の鉄格子やバルコニーのある家々など、合理的に編成された近代都市空間にはない街区の様子が、細部にまで綿密に描写される。ロマン主義旅行者にとって都市は劇場空間である。彼らにとって自国にはない光景が展開するからだ。旅行者たちは街区を散策し、社会的慣行や流儀にまで視線を注ぐ。熱い夏季にはパティオの夕涼み、ピントレスクな民族衣装の水売り、夕刻時の散歩、挨拶を交わす人々と衣装、夜には鉄格子越しに語らう恋人たちの姿、テルトゥリア（ゴーチェやブリクマンも経験した）、旅籠での集い、そして特別な日々^{ボサダ}に催される闘牛やプロセシオンなど。これらが都市に独特の彩と魅力を添える。

もちろん、「モーロ的なもの」は旅行記に氾濫している。探し求めれば、いたるところに発見できた。アンダルシア人の皮膚に、女性たちの瞳に、狭い曲がりくねる街路に、家々のパティオに、もの乞いや人々の怠惰のなかにまでも^[3]。サグントの遺跡を訪れたメリメは「セビーリヤとコルドバを見て以来、美しくも有益なものはモーロ人たちの創作である」と述べた。そのメリメはバレン



セレナーデ、コルドバで

出典：Doré's Spain

シアの絹取引所（ロンハ：フランドル風ゴシック様式）を「優雅なアラブ様式の建造物」と錯覚する⁽⁴⁾。より現実的なダヴィリエでさえ、アリカンテに立ち寄り、ヴィクトル・ユゴーの一篇の詩で詠われたミナレットを探そうとした。彼がアルメリアで出会った住民たちは、「アフリカ人のように血色が悪く、見事までにフード付きのマントを着ていた」。「そのなかの一人は確実にボアブディルの臣下の祖先にもっている」と述べている⁽⁵⁾。フォードは、シエラ・ネバーダ山脈の南側のアルプハーラのウヒハルの住民は「スペイン語を話しているが、半分モーロ人だ」と言った⁽⁶⁾。ワシントン・アーヴィングにいたっては、アルプハーラやロンダの山岳地域の人々は「祖先はモーロ人で、ボアブディル王を裏切った臣下たちの子孫である」と言い切っている⁽⁷⁾。ちなみに、外国人旅行者にとって、ジブシー、闘牛術、フラメンコまでオリエントもしくはアラブ起源として言及された。

アルベリチが指摘するように、「近代のスペイン的なものすべては、擬似アラブ趣味^{アラビズム}という深刻

な麻疹に罹っていた」⁽⁸⁾ようだ。実際、ロマンセと伝説のモリスコのグラナダをテーマに詩を書いたソリーリャをはじめ、ラーラ、ピリャエスパーサといったロマン主義のスペインの作家たちも、明らかに親モーロ的態度を濃厚に反映する作品を残している。

このアラブ的なものの称揚、同じことであるが親モーロ的態度は、スペインへの中傷や非難に帰結することもある。それは、美学的というよりも歴史的文化的な観点に立つスペイン批判である。ヒラルダやオレンジのパティオとこれに隣接する大聖堂を対置させて、モーロ人たちは繊細な芸術家、勤勉な農民、寛容な神学者に理想化されるが、これとは対照的に、迷信に囚われた不寛容なカトリックの坊主や狂信的なピサロ（インカ帝国の征服者）など、プロテスタントのイギリス人が歴史上のスペインのなかで憎悪してきたものがあげられる⁽⁹⁾。この場合、明らかにアラブ的なものは両義性を帯びている。スペイン人、あるいはアンダルシア人の怠惰や残忍性といった資質が語られるとき、とくにアンダルシア人がオリエント的あるいはモーロ的遺産を受け継いだからだとされる。こうした見方は、イギリス人にしばしば認められる。18世紀のオリエンタリズムの人種差別主義の投影だろうか⁽¹⁰⁾。結局、アンダルシア人は他者から理解され定義される存在である。

ところで、「モーロのアンダルシア」は、19世紀の外国人旅行者が初めて定義したトピックではない。実は16世紀以来、アンダルシアが「半分モーロ」という見解は、たしかにスペイン国内に存在していた。レコンキスタ以後の近世カスティリーヤ社会には、「血の純潔」思想が存続し、「旧キリスト教徒」と「新キリスト教徒」（コンベルソ：改宗者）の差別的区別が維持されてきた。アーヴィングの作品でも言及されているように、「ユダヤ人の血も、モーロ人の血も一滴たりとも混じっていない由緒正しきキリスト教徒」は、カスティリーヤ人（バスク人にも）の誇りである⁽¹¹⁾。だが、アンダルシアやレバンテ地方は遅くまでイスラーム教徒たちが存在したため「不純な土地」と見なされてきた⁽¹²⁾。ポロウは、これに関連して「アンダルシア人は様々な民族、すなわちローマ人、ヴァンダル人、モーロ人の混淆の^{カス}人種であって、おそらくその中にジプシーの血とその行動様式で、ジプシー印がわずかに混じり込んでいる」と述べて、次のように観察した。アンダルシア人は「あらゆる性格からして、他のスペイン人よりも蔑まされている」⁽¹³⁾という。

18世紀にユダヤ人やイスラームの危険が完全に消え去り、ブルボン王朝のもとで法制度の一元化が打ち出されると、「危険思想」は外からもたらされた。思想・文化の面で「汚染」はフランスから来る。このとき、外国風様式に対して生粋で自生的なものが「純粋な」ものとされた。外国趣味が啓蒙エリート層に、また当時の社会に蔓延るなか、純潔さや生粋さが「民衆」のなかにも求められた⁽¹⁴⁾。とくに啓蒙改革期から民衆的なものはマホ趣味やジプシー趣味に表現されることになる。もちろんその時点で、それらはスペインのステレオタイプに転換していないものの、その具体的現象は、アンダルシアの在地の領主貴族とジプシーの共生関係に、18世紀末の民衆演劇に見ることができる。啓蒙思想に対して「伝統主義」が擡げはじめる時代である。この文脈のなかで、逆説的にも

不純なアンダルシアという刻印が、この地を称揚するために利用される。民俗学者フリオ・カロ・バローハが指摘したように、アンダルシアは「古来より価値の奇妙な転倒が起きる場所である。古くからの下賤の民、すなわちジプシーが熱狂を呼び覚まし、また無法者や山賊が英雄として称賛された」⁽⁴⁵⁾。こうして「特殊アンダルシア的なもの」の浮上の背景には、不純に結びつく多くの特徴の意味の転換があったようだ。

ステレオタイプ化されるアンダルシアの事物

旅行者のなかには、山賊あるいは山賊伝説に魅せられた人々が多くいる。旅行記にも必ず記されているが、実際、ほぼ誰一人として山賊に遭遇した経験をもつ者はいない。それらの多くは、伝説化された山賊のエピソードであり、しかも旅行者に付き添うラバ追いやラッパ銃で武装した護衛兵を生業とする人々（エスコペータ）の話した⁽⁴⁶⁾。旅行者たちは伝説上のヒーローと会うことはなかったが、身近で見られる「民衆のヒーロー」がいた。P・ロメーロ、ペペ・イリョ、F・モンテス（パキーロ）、チクラネロといった闘牛士たちである。

闘牛の催しが近代の娯楽として確立されるのは、19世紀前半である。18世紀半に騎馬の上（馬上から）ではなく、地上で獐猛な牛と対峙する「マタドル」のプロフェッショナルが誕生して以来、ロンダやセビーリャに闘牛場が設置され、民衆の熱狂的な支持を得ていた。闘牛術の法典化と儀礼化にも進展があった。フォードがセビーリャに滞在した1830年、フェルナンド7世はセビーリャ闘牛術学校を創設する。これは3年後に廃校となったが、フォードは独特のユーモアをこめて述べている。「モーロのアンダルシアは、今でも闘牛術の総本山である。この芸術、すなわちスペインの科学を知り尽くそうとするならば、ロンダ学校で見習いを終え、しかる後にセビーリャ大学、すなわち（イベリア）半島のブルフォードで博士号を取得しなければならない」⁽⁴⁷⁾。

外国人にとって、闘牛の祭典は優れてアンダルシアの典型である。ダヴィリエが述べるように、「闘牛士はほぼいつでもアンダルシア人である。アンダルシアは闘牛術の古典的な土地であり、彼らは闘牛場の外でこの地方の衣服を着用し」ていた⁽⁴⁸⁾。闘牛の祭典は、いつでも特別な出来事である。そこには、芸術と暴力との調和、あでやかな色彩と美学的表現、雄々しくも猛々しい死を賭した衝突がある。初めて見る旅行者には、驚愕の念を引き起こすに十分すぎるほどだった。最初の反応は正反対に分かれる。しかし、ほとんどの旅行者たちが魔法を見たかのように魅了された。フランスの知識人エドガ・キネの見解によれば、闘牛の催しは単なる娯楽ではなく、スペインの「習慣に深く根差した一制度であり、この民族の精神の核をなすものである。人々の強靱な資質は、闘牛のとの闘いに支えられており、マホーマを、・・・そしてナポレオンを打ち負かしたのだ」⁽⁴⁹⁾。

アンダルシアと闘牛の結びつきから、必然的にアンダルシア人の性格が語られる。野蛮な娯楽は、まさに原始的かつ粗暴で無教養な民族にふさわしい、余暇の気晴らしと言うわけである。いずれに

せよ、旅行者たちは新しい民衆のヒーロー誕生に立ち会っている。貧しい下層階級からはい上がり栄光をつかむ闘牛士（とくにマタドール）は、アンダルシアの、スペインの典型であり、同時に比類なき祭典の主役である⁽²⁰⁾。

ところで、とくにメリメ、ゴーチェ、ジュマによって紹介された闘牛は、パリをはじめヨーロッパ各地でその熱い人気を高めていた。1853年の夏、ベルギーのブリュッセルでブラバント公爵の成婚を祝して、スペインの著名な闘牛士たちによる興行が催され、その記念行事に新しいジャンル（フラメンコ）の踊り子たちも登場した。闘牛趣味は、アンダルシアの踊りと歌に密接に結びついていて、すでにスペインの国民舞踊のボレロやファンダンゴといった「官能的な踊り子」たちは、ヨーロッパで絶大な人気と評価を獲得していた⁽²¹⁾。そしてボレロ流派も変容しつつあった。

官能的なアンダルシア女性、ジプシーの踊り子たち

ヨーロッパのロマン主義者の間では、スペイン女性と官能性を結びつけるのが一つのトピックだった。民衆のヒーローである闘牛士とともに、メリメの小説で公式化される「カルメン」はアンダルシア女性の、スペイン女性の典型とされた。そしてアンダルシア女性のステレオタイプが、ジプシー女性の踊り子に具現される。たしかに、メリメの「カルメン」は強烈な衝撃を与えたのだろう。

しかし、旅行者たちは、それぞれの「カルメン」を探し求めて発見している。ワシントン・アーヴィングは、ある伯爵家族がアルハンブラ宮殿に逗留したとき、伯爵令嬢と出会う。ロマンセの曲目やモーロ人を題材にした伝統的なロマンセを噴水の傍らでギターを抱えて歌った、その魅惑的な少女が生涯の思い出になるだろう、と記している。名前もカルメンである⁽²²⁾。ゴーチェはいつでも、行く先々で典型的スペイン女性を探した。マドリードで最初にして最後に、一人のマノーラ（美しい下町娘：フランスのグリゼット）を見つけた。彼はアンダルシアでは、「セビーリャ美人」「グラナダ美人」「マラガ美人」を発見する⁽²³⁾。ジョセフィーヌ・プリンクマンは、「男たちが噂にする典型的スペイン女性などはない」と言っている⁽²⁴⁾。

スペイン舞踊、とくにアンダルシアの踊りは、旅行者にとって魅力的な見世物である。それを見る機会はしばしばあった。外国人がこの「folklore」を見物できたのは劇場である。フォードが述べたように、スペインの劇場の最大の魅力は民族舞踊である。その「踊りは比類のない、模倣すらできない、唯一無二のもの、それはアンダルシア人だけで踊られ」、カスタネットの響きは、どんな無関心な旅行者でさえも目覚めさせたという⁽²⁵⁾。明らかに、それは18世紀半ばに誕生したボレロ、あるいはボレロ流派が採り入れたファンダンゴやカチューチャである。フォードは、これとは別に、ジプシー女性の踊りにも注目した。セビーリャ周縁街区のトゥリアナは、闘牛士、密輸業者、マホ、ならず者たちがうごめく特殊な空間である。ここではジプシー女性の「プリミエール・



ビトを踊るジブシー女性、セビーリャの居酒屋で

出典：Doré's Spain

ダンサー」が旅行者たちに演技を披露していた。それを取り仕切るのは、年長のジブシー女性である⁽⁶⁶⁾。

ところで、1820年代末まで、アーヴィングをはじめ旅行者たちは、物珍しさに魅かれて自然発生的に催される特異なフォルクローアの演奏に立ち会う機会ももてた。ほぼいずれの場合も、旅籠や居酒屋で体験したか、偶然に村祭りに出会った時である⁽⁶⁷⁾。1830年代になると、アンダルシアの踊り手や歌手たちの間で、プロフェッショナル化がかなり進行し、前述したトゥリアナのジブシー女性の踊りは商業化されていた。他方、旅館経営者も客の要望に応じて踊り子たちを手配し、しばしば旅館の食堂でフィエスタが催されている。セビーリャではボレロの踊り子たちが呼ばれたが、たとえばブリンクマンの場合、旅館の女将がタバコ女工と闘牛士を呼んでフィエスタが催されている。そのブリンクマンは、ジブシーが多く住むトゥリアナ地区に足を運んだが、彼らの悲惨な状

態と怪しげな雰囲気嫌悪感すら示している。それでも彼女は、カディスのビーニャス地区で見た「ジプシー女性たち」の見事な踊りに感激した。ちなみに、プリंकマンにとってジプシーの踊りは「官能的」ではなかったようだ⁽²⁸⁾。

1840年代のグラナダでも、旅行者のために旅館で踊りの祭典が催されていた。ボレロの本場セビーリャとは異なり、踊り子たちはもっぱらジプシー女性である。グラナダで下宿生活のゴーチェは、荒廃したアルバイシンの石畳の路上で、偶然に「ソロンゴ」を練習する裸同然のジプシー少女を目撃した⁽²⁹⁾が、6年後のこと、ジュマは一人のジプシー男性と知り合い、旅館でジプシーの踊りを見物した⁽³⁰⁾。おそらく1840年代末、グラナダの「バイレ・ヒターノ」は旅行者向けの興行と化していた。「ジプシー女性のバイレを見ずしてグラナダを後にする外国人はいない」とダヴィリエが



ジプシーの子供たちが踊る、グラナダのサクロモンテ
出典：Doré's Spain

証言するように、旅行者たちは旅館で踊りの祭典を楽しんだ。これを取り仕切るのは、ギター演奏者のジプシー男性である。しかし、この種の踊りは旅行者の好みに合わせたもので、「その原始的な野性味は、すでに消えてしまっていた」。物足りなさを味わった旅行者のなかには、サクロモンテの洞窟まで足を運ぶ人々もいたという⁽³¹⁾。

ところで、一つのステレオタイプに「フラメンコのスペイン」がある。しかしロマン主義旅行者の誰一人として「フラメンコ」の呼称を使っていない。ゲルハルト・シュタイングレスによると、イサベル2世の時代、すなわち1830年代から60年代にセビーリャの都市周縁街区のポヘミア的環境のなかでフラメンコが近代民衆芸術として生成する⁽³²⁾。旅行者たちは、まさにフラメンコ生成に居合わせたことになる。フラメンコの呼称は最初にジプシー風の踊りに使われ、歌とギター演奏とが三位一体となって使われるのは、早くて1860年代末、一般化するの80年代以降である。そうした意味で、フラメンコを最初に体験したのはダヴィリエではないだろうか。彼はドレとともに、セビーリャの中心街に位置する「アカデミア」と呼ばれるサロン（のちにカフェ・デ・ラ・カンパーナと呼ばれる）で「フラメンコ」を見たはずである⁽³³⁾。

古い慣習・人物類型の行き先、フェリア

1840年にスペインを旅したテオフィル・ゴーチェは、スペイン女性の衣装がパリ風になったこと、パリで普通にみられる女性の帽子が、マンティーリャに取って代わったこと、彼自身もグラナダの衣料品店で買い求めたマホの衣装も、消滅の一途をたどるのを実感していた。いわゆる民族衣装がスペイン人の日常生活からほぼ消え去るのは、19世紀半ばのことである。

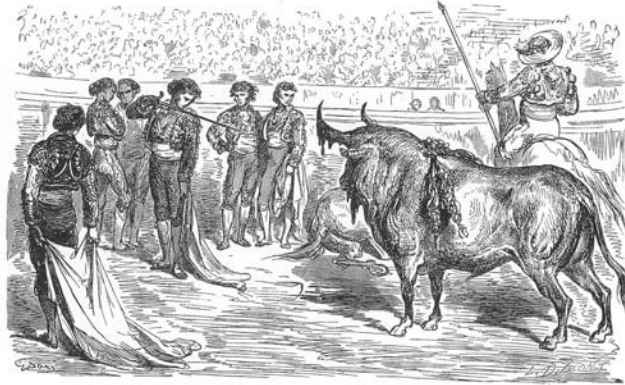
しかし、伝統的な地方色に豊かな衣裳、風俗・習慣、人間類型といった、多くのスペインの事物は、新たに誕生する祝祭のなかに出そろうことになる。その祝祭とはセビーリャ最大の春祭り、4月のフェリアである。本来これは家畜市だったが、19世紀初頭以来かつての賑わいを次第に失っていた。そこでバルセローナ出身の実業家ナスシーソ・ポナプラタは、バスク出身の実業家ホセ・マリア・イバーラとともに、1846年に春祭り開催を市議会に提案し、翌年から家畜市の性格をとどめながらも、近代的イベントに転換していく。

フェリア会場は、街区周辺の南に広がるサンベルナルドとカディス駅の中間に位置し、そこからタバコ工場、大聖堂とヒラルダ、アルカサル庭園を囲む城壁が眺望できる。ダヴィリエの叙述にそって、フェリアの様子を見てみよう。会場の空き地には、弧をなすように、色とりどりの花やりボンで飾られた幌馬車や四輪荷車が列をなし、野営テント（のちにカセータとなる）とともに多くの屋台が立ち並ぶ。リキュール類やワインの屋台、ジプシーによるブルニューエロ（ドーナツ風のオリブ油で揚げた菓子）の屋台など。ジプシーの博労たちや家畜取引業者のほか、マホやマハ姿の若い男女が登場する。フェリアの最終日には、タンバリンやカスターネットのリズムに合わせ民族

旅行者たちが創ったスペイン・イメージをめぐる
—アンダルシア神話の生成と持続—

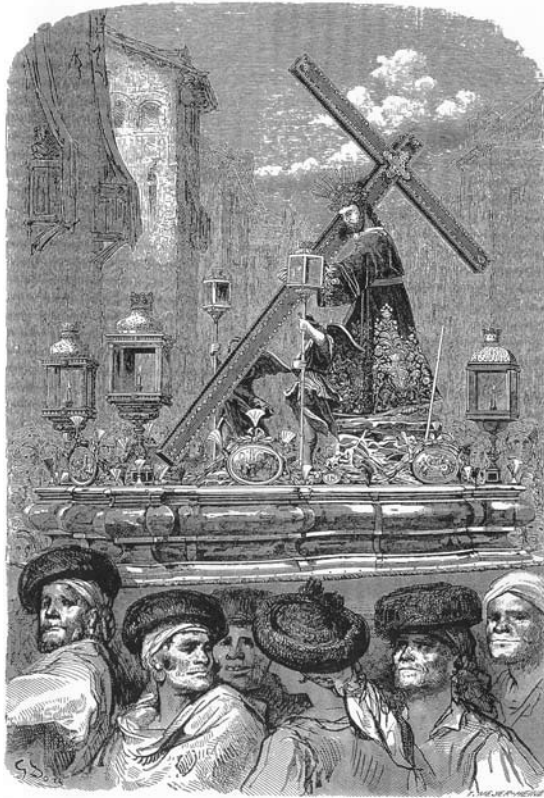
舞踊の競演が催された⁽³⁴⁾。フラメンコの衣裳もこのころに現れる。ダヴィリエとドレが1862年にセビーリャを訪れたとき、すでに近代的な大イベントに変容し、重要な観光資源となっていた。

定期市が近代的な装いで世俗的な祭りに変化した例として、セビーリャ近郊のマイレーナ（デ・アルコル）のフェリアがある。マヌエル・クエンディアによれば、マイレーナのフェリアは少なくとも19世紀半ばまで、セビーリャのフェリア以上に、アンダルシア全体を象徴するピントレスクな光景を呈していた。きらびやかな民族衣裳にも流行がある。「マイレーナではアンダルシア中の次の年の流行が予告される」とクエンディアは述べている⁽³⁵⁾。そのほかに、古代イタリカの史跡の近くのサンチボンセのフェリアがあった。いずれも、ダヴィリエとドレが描いた地方色あふれる祭りである。彼らを魅了した祭りのなかに、トリーホスのフェリアもある。これはロメリーア（聖地へ



闘牛（上）、マホとマハたち、セビーリャ近郊のロシオのお祭り（下）

出典：Dore's Spain



セマーナ・サンタのパソ、セビーリャ

出典：Doré's Spain

の巡礼)の一種で、トリーホス(セビーリャ近郊の小村)は起点にすぎず、舞台はトゥリアナ地区のジブシーの居住区カスティージャ通りである。しかしロメリーアでもっとも有名なのは、ロシオ巡礼(13世紀に起源)だろう。アヤモンテ近郊の村ロシオにアンダルシア中から人々が花飾りの幌馬車や荷車で馳せつけ、「ロシオの聖母」を祝福する。最終日は、その他のフィエスタと同様に、アンダルシア舞踊でフィナーレが飾られる^[36]。この一場面もドレが版画に残している。

旅行者たちが好奇心を示して好んで見たものは、結局のところ山賊、闘牛士、ジブシー女性の踊り子であり、いずれのタイプもアンダルシア下層民衆の世界から輩出した、いわば社会の周縁的セクトにすぎない。これらは、文学的想像のなかでは単にマージナルな扱いしか受けてこなかったが、ロマン主義のもとでアンダルシアの典型としてシンボル化されることになる。こうして、アンダルシア神話はいくつかのステレオタイプを通じて形成されるのであるが、バルナール・ロドリゲスが指摘したように、それは「アンダルシア人のいないアンダルシア」でもある^[37]。

第4章 反射作用、スペイン的なものの美学的還元

1830年代から40年代にかけ、とくにフランスでは^{エスバニョリスモ}スペイン趣味が流行する時期、スペイン・ロマン主義はヨーロッパに亡命していた作家や芸術家の帰国を契機に高揚期を迎えた⁽¹⁾。ロマン主義と密接に結びついて文学や美術（演劇も）に、外部で創られたスペイン・イメージに対するリアクションとして、一つのジャンルが現れる。アンダルシア色に染まった^{コストゥンプリスモ}風俗描写主義がそれである。以下では、そうした文脈におけるカタルーニャの文化状況にも言及することにしたい。

リアクションとしての風俗描写主義

1830年代、外国人による紀行文学が照らし出してくれたピントレスクな民衆的世界とその文学的暗示力に触発され、一群の作家たちが登場する。生粋の民衆の環境に眼差しを向ける風俗描写文学は、外国人旅行者によるロマンチックな空想で歪められ戯画化されたスペイン・イメージを修正するために、「スペインの事物」をその本来の場において表現しようとした。18世紀後半に見られたような習慣に対する辛辣な風刺ではなく、多少の皮肉を込めながら、フランス化あるいはヨーロッパ化する習慣の変化に抗う⁽²⁾。それは、過去への強烈なノスタルジーをともなった国民主義的な文芸潮流と言えよう。客観的に距離を置き、スペインの事物、国民気質や生来的にして自然なままのスペインを発見し描写する。

ロマン主義の世代の作家たちは、スペインの文化的孤立がすでに終わったことを自覚していた。風俗描写主義は「ヨーロッパの浸透」の結果であり、同時にスペインの国民的アイデンティティの危機意識から生まれたのである⁽³⁾。興味深いのは、民衆の習慣を啓蒙主義の立場から批判したのがアンダルシアの作家たちだったように、また写実主義文学でもアンダルシアの作家たちが目立ったように、このジャンル生成において卓越した地位を占めたのもアンダルシアの作家たちである。M・J・ラーラとメソネロス・ロマノスとともに、マラガ出身のエステバネス・カルデロンとカディス出身のセシリア・ブェール・デ・ファベール（男性のペンネーム：フェルナン・カバリエーロ）がその立役者だった⁽⁴⁾。「スペイン化したドイツ女性」のフェルナン・カバリエーロは、絶えず移ろう社会を前にたじろぎ、その保守主義的・カトリシズムの立場から、祝祭衣装、日常表現、職業タイプ、特異な人物像、民衆慣行を、俗化する日常性から救出しようとする。彼女は地方色豊かな『カモメ』を残し、『アンダルシア民衆の天分と機知』では、民衆の日常生活からコブラや諺と民話を採取して記録にとどめた⁽⁵⁾。エステバネスは、現実離れた「お祭り騒ぎに浮かれるモリスコ的な陳腐なアンダルシア」を『アンダルシアの情景』のなかで描いた⁽⁶⁾。そこには、それまで文学的にマージナルな題材にすぎなかった事物や人物類型が登場し、それらはアンダルシアの典型、さらに象徴的なカテゴリーにまで高められた。18世紀末の特定のサイネーテ（風俗喜劇）、とくにカディ

スの劇作家J・イグナシオ・ゴンサレス・デル・カスティージョの作品群には、マハ・マホやジブシーをはじめ、数々の民衆歌謡（アンダルシアの歌）が出てくる⁽⁷⁾。カディスの県令（1837年）だったエステバネスは、それを再利用したのである。

風俗描写主義は美術に一層鮮明に表れた。風俗描写絵画にも先例がある。マドリードには、タピストリーに民衆やその場面や一連の闘牛を描いたゴヤが、セビーリャにはムリーリョがいる。とくにセビーリャ流派は、センチメンタルで逸話風であり、地元の観光業に依存する面があった⁽⁸⁾。好まれた画題は、ヒラルダ、マホとマハ、踊り子、闘牛士、フィエスタとフェリア、タバコ女工、山賊、フラメンコ、さらに街区で見られた盲人楽師やもの乞いの場面など、多様である。なかには闘牛士モンテスの肖像画のように、リトグラフで広くパリにまで出回った作品もあった。セビーリャ流派の代表格ホセ・ドミンゲス・ベッケルは「マイレーナのフェリアのリチャード・フォード」を、ロドリゲス・デ・グスマンはアンダルシア衣裳のエウヘニア・デ・モンティーホの肖像画をそれぞれ残している⁽⁹⁾。いずれにせよ、そこにはセビーリャの地方色が強烈に刷りこまれていた。レイナ・バラソンは、アンダルシア衣裳を着た貴族女性たちの肖像画に着目し、そこに18世紀に土地貴族層に見られた民衆趣味の再来をみる。フランスの流行が反スペイン的と非難されるなかで、平民衣装はスペイン趣味をシンボリックに示す意図が込められていたからだ⁽¹⁰⁾。

イサベル2世の立憲君主制の時代、風俗描写主義のなかに穏健なスペイン社会が表現され、社会も、そのように自己表現していた。こう指摘する思想史家アランゲーレンは、その時代の空気を鋭く観察した。すなわち、永代所有財産解放令（教会・修道院財産の国有化・売却：1836年）の結果形成された新たな土地所有を基盤に、秩序と安全の希求、これを保障し同時に匪賊鎮圧のための治安警備隊の創設（1843年）、宗教的プロセシオンや慈善活動の熱意と宗教生活の称揚、「ちょうど真ん中」を美德とする折衷的態度、緊張なき社会における貧民への温情的態度など、とくに風俗描写絵画には、そのような願望と性向が忠実に反映されていた⁽¹¹⁾。風俗描写主義は、いわば一つの世論とも言えるだろう。

風俗描写主義は、フランスの流行を追い求める上流階級に対抗し、「伝統」の受託者あるいは保存者として「民衆」を称揚し、そこに国民的なものや生粋なものを探し求めた。それは、未来への不安と恐れからの過去の美化にすぎず、その意味で、きわめて保守主義的だった。民衆の現実に対する批判意識は一切排除される。選びとられ描かれた情景は、民衆の日常的現実や労働の世界ではなく、余暇とフィエスタである。結局、エステバネスもメソネロス・ロマノスも認めたように、外国人のスペイン・イメージに 대응するように「スペインの事物」を描いたのだ⁽¹²⁾。このように、外国人旅行者のスペイン・イメージと風俗描写主義には、奇妙なほどの一致があった。反射作用とでも呼べる現象である。

カタルーニャに浸透するアンダルシア趣味

19世紀初頭のカタルーニャにとって、アンダルシアは啓蒙改革家の批判的なビジョンにはほど遠く、「アメリカへの窓口」、すなわち植民地貿易に「特化された広場」である。とりわけカディスは、多くのカタルーニャ商人や企業家の旅行先であり定住地でもあった。カタルーニャでは、カディス国民議会や独立戦争で高揚した祖国愛や自由主義と結びついて、ポジティブなアンダルシア・イメージが存在していた。カディスとの良好な関係は、文化面にも反映していた。18世紀末以来、マホ趣味とともに、サイネーテやコメディの愛好、とくに「伝統的」な音楽への趣味がアンダルシアのプロトタイプを通じてカタルーニャに広まり、19世紀前半に大いに流行する⁽¹³⁾。

マルティン・コラーレスは、19世紀前半のバルセローナの演劇場において、いかに生粋のスペイン民衆音楽、とくにアンダルシアの歌や踊り—ファンダンゴ、ボレロ、セギディーリヤス—とともに、ジプシーの歌や、彼らをテーマにした劇作品が上演されたかを実証的に考察している。この種のアンダルシア趣味に加えて、闘牛熱も存在した。A・カンブマニーなどのカタルーニャ啓蒙主義者たちは、唯一オペラに対抗できるのは闘牛であるとして、スペイン固有の伝統の名において闘牛を擁護した⁽¹⁴⁾。闘牛は生成しつつあった都市民衆文化の象徴となる。マルティンによれば、1823年にバルセローナで、スペイン舞踊団が「国民舞踊」^{バイレナシオナル}の公演を行った。同舞踊団は、アンダルシア、とくにカディスとカタルーニャ出身の男女の俳優や踊り手から構成され、カディスはもちろん、スペイン中で公演活動を展開した。すでにアンダルシア的雰囲気のある作品群がブームを呼んでいた。風俗描写的テーマを通じて、アンダルシアに魅かれたカタルーニャの作家や舞踊家もいる。劇作家リュシア・フランセスク・コメーリヤ、ファンダンゴやサパテアード（靴底で床を打つ技）の振付を採り入れたR・モラガス、さらに劇作家ジョセップ・ロブレニョである⁽¹⁵⁾。

ところで、カタルーニャもフランスのロマン主義旅行者の旅程に組み込まれていた。帰路の途中になるが、モンセラー修道院、その近隣の村々や山岳地帯は、当時の旅行ガイドブックに紹介されている。メリメは1846年（4回目）のスペイン旅行でバルセローナに立ち寄り、アンダルシアを思い起こさせる出来事に遭遇した。それは、あるジプシー家族の洗礼式に際して催された歌と踊りのフィエスタである。ジプシーの男女それぞれ5人ほどと、泥棒の類か博労風のカタルーニャ人が20人ほどの集い、カロ（ジプシー言葉）とカタルーニャ語だけが飛び交った⁽¹⁶⁾。ダヴィリエとドレは「異なるスペイン」の一地方としてカタルーニャを観察し、教会入口にたむろするもの乞いたち、山賊フランシスコ・ピラローの処刑、コブラや農民の舞踊など、エキゾチズムあふれるロマンチックな情景を残している。他方、ヌニェス・ルイスが指摘するように、旅行者たちはバルセローナの文化人の間に「アンダルシアで収穫したイメージの刻印」を残した⁽¹⁷⁾。

アンダルシア的なものへの「良き」イメージは、カタルーニャがヨーロッパ・ロマン主義に刺激され、「新しいアンダルシア」を発見したときに強化された。ヨーロッパの文化の中心パリで「官

能的なスペイン舞踊」が旋風を起こす1830年代初頭以降、パリはスペイン趣味の熱情とアンダルシア神話の伝播媒体になっていた。すなわち、パリからバルセローナ＝マドリードの文化伝播の経路である。当然、カタルーニャにおいて、アンダルシアはエキゾチックで情熱的な土地、同時にジブシーの土地として想像される⁽¹⁸⁾。カタルーニャから多くの芸術家、音楽家、19世紀後半には画家たちが、アンダルシアに誘われる。ボレロの踊り子マヌエラ・ガルシアは、リセオの舞踊監督ジョアン・カンプルビーとペアを組んでいたが、1830年代末にグラナダを訪れたことがある。この踊り子は、サクロモンテのジブシーの踊り（ソロンゴ）を学び、バルセローナの劇場で披露した。バルセローナを拠点に活躍する踊り手には、マリアノ・カンプルビー（ジョアンと兄弟か？）とドロレス・セラルール、フランセスク・フォントやマヌエラ・ドゥビノンがいた⁽¹⁹⁾。この二組の踊り手たちは、1833年にパリのオペラ座で華々しいデビューを飾り、「ダンス革命」をもたらしている。このとき、ボレロの踊り子ドロレス・セラルールは「セビーリャ」出身、マヌエラ・ドゥビノンは「カディス」出身として紹介された。とくにドロレスは、1830年代半ばから40年代末まで、パリの公衆を魅了したスペイン舞踊の象徴的存在だった。もちろん、アンダルシア出身の踊り子たちもこの時期に登場し、50年代半ばには「ジブシー」の踊り子たちもパリに登場した⁽²⁰⁾。

ロマンチックなスペイン・イメージが流布するなか、カタルーニャでもアンダルシア色の風俗描写主義と生粋主義の再生産に惜しみない態度が見られる。とくに1820年から1850年に近代化を遂げるバルセローナでは、ブルジョワ層と民衆労働者の好みに適合する文化産業と結びついて、風俗描写主義が勝利する⁽²¹⁾。こうして、カタルーニャのアンダルシア趣味は、劇場、カフェ、居酒屋、地方の祝祭にまで浸透し、生成途上のフラメンコとジブシー趣味、そして闘牛の催しも熱狂を呼んだ。このようなアンダルシア的文化要素は、工業化するバルセローナの都市民衆文化に統合したが、それらは、労働者の「規律化」を求めるエリート層の側から、次にカタルーニャ主義によって拒絶されることになる。とはいえ、アンダルシア神話とそのステレオタイプが造形芸術の美学的な刷新として、あるいはパリ経由の前衛芸術の「素材」として受け入れられるかぎり、「アンダルシア」はカタルーニャに存在し続けるのである⁽²²⁾。

むすびにかえて

最後に、逸話的な事柄を紹介しよう。貴族階級の間にはスペインの生粋なものとしてマホ・ジブシー趣味が流行するなか、幼少だったエウヘニア・デ・モンティーホ（1826年グラナダ生まれ）は、テーブルの上でアンダルシアの踊りを見事に踊っていたという。母親のモンティーホ伯爵夫人マヌエラが、マドリードの伯爵邸にスペイン・ジャンル専門の音楽家たちを集めてテルトゥリアを催した時のことである⁽¹⁾。そのエウヘニアは、1853年に皇帝ナポレオン3世と結婚する。19世紀半ばの

パリでは、まさにスペイン趣味の熱情が頂点に達していた。近代史家ペレス・ガルソンがその事例としてあげるように、皇后ウージェニーのサロンは、「エスパニョラダ」（スペイン的なもの過大な誇張表現）であふれていた。1855年のパリ万国博覧会のスペインのパビリオンは、オリエント的、ネオアラブ的、より直接的にはアルハンブラ様式で、のちにネオムデハルやネオゴシックへと連なっていく⁽²⁾。

民俗学者J・カロ・バローハも、かつて力説したことがある。「アンダルシア趣味は、1830年から1860年まで、文学、音楽、美術のジャンルで大流行し、メリメやイラディエル⁽³⁾、この二人と親交のあったウージェニー皇后からわれわれの哀れな盲人楽師までが、その展開に寄与した」。それは民俗描写主義とともに、外国のもの、外国風に対するリアクションだったとされる⁽⁴⁾。スペイン・イメージは保守主義を基調とする、自由主義的・国民的ステレオタイプの構成要素として定着し、古い貴族様式（民衆趣味・ジプシー趣味）を模倣するアンダルシアの新興大土地所有者もそれに加担した。それは、ペレス・ガルソンが示唆するように、スペイン的なものの美学的還元あるいは「folkloria化」である⁽⁵⁾。

しかし、少なくとも18世紀末、アンダルシアの伝統的な民衆文化、folkloriaとしての歌や踊りは完全に消滅していた。その残滓は、商業化された娯楽文化（サイネーテなど）のなかに同化されていたからだ。1830年代の自由主義革命をへて、スペインは国民国家として成立したが、国民的アイデンティティ探しの迷路のなかで苦悩していた。浸透するヨーロッパ化（フランス化）の波を前に、中産階級の作家や知識人たちは、スペインの伝統と生粋主義を「民衆」に探し求めたが、結局のところ、発見されたのは事前にステレオタイプ化された、ピントレスクで派手な「アンダルシアの事物」にすぎなかった。ここで想起されるのは、スペインが18世紀後半以来、引きずってきた文化闘争の局面である。すなわち、啓蒙の自由主義的な思想に対する反動、フランス革命を契機とする国境封鎖、曖昧な結果をともなった独立戦争、そしてヨーロッパ文化との接触といった一連の出来事の流れのなかに、外部で創られたロマンチックなスペイン・イメージへの反作用・受容を位置づけられよう。

それと並行してロマン主義歴史学が誕生するなか、スペイン国民の「他者」としてユダヤ人とイスラームが確定される時、カトリック教は、まぎれもなく国民の基本的アイデンティティとされたのである。「宗教感情の一体性」のシンボル化は、「レコンキスタ」に具体的に表れた。だが、自由主義者たちは、スペインでオリエント学を制度化する当初から、アラブの文化遺産を国家の「国民的財産」に包摂・統合しようとしていたのである⁽⁶⁾。

註

はじめに

- (1) Jover, J.M., et al., *España: Sociedad, Política y Civilización (Siglo XIX –XX)*, Madrid, Editorial Debate, 2001, p. 81.
- (2) Pellistrandi, Benoît, “La imagen de España en Francia en el siglo XX”, Morales Moya, A. (coord.), *Nacionalismo e imagen de España*, Madrid, España Nuevo Milenio, 2001, pp. 91-103. カルメンと関連して、1997年にEU規模で行われた各国イメージに関するアンケート調査の一端を紹介する。スペインを連想する架空の人物に関する質問で、カルメンはドン・キホーテ、ドン・フアンに続いて馴染みの人物にあげられた。また調査対象者の20%のヨーロッパ市民がスペインは「オリエンタルな」国民と回答している。Encuesta citada por J. F. Colmeiro, “El Oriente comienza en los Pirineos (La construcción orientalista de Carmen)”, *Revista de Occidente*, Núm. 264, mayo de 2003, p. 57.
- (3) Bernal Rodríguez, Manuel, “La forja del mito andaluz”, Bernal Rodríguez, Antonio Miguel (dir.), *Historia de Andalucía*, t. VII, Cupsa Editorial/Editorial Planeta, 1981, pp. 153-163.
- (4) Bernal Rodríguez, M., *La Andalucía de los libros de viaje del siglo XIX*, Sevilla, Eds. Andaluzas, 1985, p. 22-28; Pérez Garzón, Juan-Sisinio, “El nacionalismo español en sus orígenes: factores de configuración”, García Rovira, A.M. (ed.), *España, ¿nación de naciones?*, Madrid, Marcial Pons, 1999, pp. 53-86.
- (5) 主な文献として、すでに紹介したマヌエル・ベルナルのその他の作品も含め、以下のものがある。Bernal Rodríguez, M., “La tierra más hermosa del mundo”, pp.165-176; “Un territorio de marginados: Bandoleros, contrabandistas, torreros y gitanos”, pp. 177-213, *Historia de Andalucía*, t. VII, Cupsa Editorial/Editorial Planeta, 1981; Gonzalez Troyano, A., et al., *La imagen de Andalucía de los viajeros románticos y Homenaje a Gerald Brenan* (以下IAVRと略記), Diputación Provincial de Málaga, 1987; Alberich, José, *Del Támesis al Guadalquivir. Antología de viajeros ingleses en la Sevilla del siglo XIX*, Universidad de Sevilla, 2000 (2 ed.); Echeverría Pereda, E., *Andalucía y las viajeras francesas en el siglo XIX*, Universidad de Málaga, 1995; Serrano García, R., *El Fin del Antiguo Régimen (1808-1872)*, Madrid, Editorial Síntesis, 2001; Calvo Serraller, “Viajeros románticos franceses y el mito de España”, *Imagen Romántica del Legado Andalusi* (以下IRLAと略記), Granada, Lunweg Editores, 1995, pp. 139-143; López Ontivero, A., *La imagen de Andalucía según los viajeros ilustrados y románticos*, Granada, Ed. Caja de Granada, 2008. また19世紀の

フランス人旅行者に関する中辞典的な2巻も有益な資料である。Suárez Sánchez, E. et. al., *Viajeros francófonos en la Andalucía del siglo XIX*, con prólogo de Bartolomé Bennassar, 2 vols., Diputación de Sevilla, 2012.

第1章

- (1) Jover, J. M., et al., *op. cit.*, p. 81. 「黒い伝説」については、宮崎和夫「補説10 黒い伝説」『スペイン史1』（関哲行・立石博高・中塚次郎編）、山川出版社、324-326頁参照。
- (2) Calvo Serraller, *op. cit.*, pp. 139-143.
- (3) Echeverría Pereda, *op. cit.*, pp. 24; García Serrano, *op. cit.*, p. 70.
- (4) Echevarría Pereda, E., *op. cit.*, p. 25; Bernal Rodríguez, M., “Tipología literarias de la Andalucía romántica”, IAVR, pp. 103-123.
- (5) Bernal Rodríguez, M., *La Andalucía de los libros del viaje del siglo XIX*, pp. 25-26.
- (6) テオフィル・ゴーチエ『スペイン紀行』（桑原隆行訳）法政大学出版局、2008年、訳者によるあとがき「夢の旅—ゴーチエの『スペイン紀行』について」411-434頁参照。
- (7) Viñes Millet, Cristina, *Granada en los libros de viaje*, Granada, Ed. Miguel Sánchez, 1999, p. 126.
- (8) Serrano García, R., *op. cit.*, p. 70; Bernal Rodríguez, M., “La forja del mito andaluz”, pp. 155-156.
- (9) Viñes Millet, C., *op. cit.*, pp. 133 y 143.
- (10) *Ibid.*, p. 131.
- (11) *Ibid.*, p. 143.
- (12) Díaz López, J. A., “Modelos literarios y estéticos de los viajeros románticos ingleses. De teoría a la praxis”, IRLA, pp. 85-94.
- (13) Serrano García, R., *op. cit.*, p. 80.
- (14) Jover, J. M., et al., *op. cit.*, p. 81.
- (15) Echevarría Pereda, E., *op. cit.*, p. 44.
- (16) Aymes, Jean-René, *Los españoles en Francia (1808-1814). La deportación bajo el Primer Imperio*, Madrid, Ed. Siglo XXI, p. 306.
- (17) Echevarría Pereda, E., *op. cit.*, p. 40. 関連してカルボ・セラリエールは次のように述べている。スペイン・フランス両国の歴史と文化は近世以来、密接な関係にあり、とく独立戦争とスペインからのフランスへの大量の政治亡命を契機に、ロマン主義のフランスの知識人や芸術家たちは、スペインを訪れなかった作家（ミュッセやバルザックなど）も含めてスペイン文化に最大級

の関心を抱き、19世紀を通じてスペインを一大ブームにまで押した。Calvo Serraller, *op. cit.*, pp. 139-143.

(18) Alberich, J., *op. cit.*, p. 23.

(19) *Id.*, p. 24; Moreno Garrido, A., “El grabado sobre Andalucía en la estética romántica (1830-1850)”, IRLA, pp. 71-78.

(20) García Serrano, *op. cit.*, pp. 75-77; Calvo Serraller, *op. cit.*, p. 141.

第2章

(1) 1851年に増補改訂版が出版された。邦訳『アルハンブラ物語』（初版、馬場久吉訳、岩波文庫、1942年／江間章子訳、講談社文庫、1976年／平沼孝之訳、岩波文庫、2巻、1997年、増補改訂版）がある。なお、ワシントン・アーヴィングは歴史家でもあり、1826年にスペイン公使から公使館員の旅券を交付されてマドリードに入り、同年『コロンブス伝』4巻を、さらにセビーリャに赴いて資料収集し、1827年に『グラナダの征服』2巻を書き上げている。アーヴィングに関する詳細な最近の研究には以下がある。Garnica, Antonio (ed.), *Wasington Irving en Andalucía*, Sevilla, Fundación José Manuel Lara, 2004.

(2) 「親モーロ的態度」とはスペイン語のmaurofilia。地理学者ロペス・オンティベロや紀行文学の専門家アルベリチが用いている。この語彙は、北西アフリカにあった古代ローマ帝国の属州モーリタニアから来る。これから派生したモーロ（人）はかの地のベルベル人とアラブ人の混血を指し、8世紀から15世紀にかけてイベリア半島を支配したイスラーム教徒。モリスコとは、とくにレコンキスタ後にキリスト教に強制改宗させられ16世紀を通じて残留したモーロ人をいう。López Ontivero, A., *op. cit.*, p. 28参照。

(3) *Imagen Romántica de España*, Catálogo Exposición Ministerio de Cultura, 1981, p. 13. Citado por Díaz López, *op. cit.*, p. 85.

(4) アーヴィングは、マホを次のように描いている。アンダルシアの伊達男の「衣装も、美装をこらしたものだ。緑色のピロード地の、体にぴったりと合った、銀の飾りボタンがたくさん並んだ短めのジャケットを粋に着こなし、それぞれのポケットから純白のハンカチを覗かせ、同じ緑色のピロード地の乗馬ズボンの両側には、腰から膝までボタンが一行についている。ピンク色のスカーフを首に巻き、スカーフに両端は、細かい襷の入ったシャツの胸あたりまで飾りリングで止め、腰にはスカーフと釣り合う飾り帯を巻いている。最上質のあずき色の皮で作られたすね当ても優雅な細工物で、裏側のふくら脛の部分はストッキングが覗くようにくりぬかれていて、同じあずき色のしなやかな靴が形のよい足を引き締めている」。マホの衣裳は時代とともに、また場所によって異なり変化した。ワシントン・アーヴィング、前掲書、第1巻、60頁。

- (5) フォードの『スペイン旅行者のためのハンドブック』(1845年)は、バイロン卿の旧友のジョン・マレーが1830年代から出版していたヨーロッパ各国旅行ガイドブックのシリーズの一環として出版された。初版は2巻本で千ページを超えたが、短期間のうちに完売となり、1847年に圧縮された第2版が、1855年にコンパクトな第3版がそれぞれ出版された。他方、初版の内容をより平易な形でまとめ、ガイドブックとはやや趣を異にする『スペイン旅行採集』(1846年)も出版される。これは詩人のエンリーケ・デ・メサによるスペイン語版で、1922年にマドリッドで出版された『スペインの事物』である。筆者が用いたのは以下のものである。Ford, Richard, *Las cosas de España*, Madrid, Ediciones Turner, 1974; *Manual para viajeros por Andalucía y lectores en casa*, Madrid, Ediciones Turner, 1988 (3 ed.)
- (6) なお、著名なイスパニスト、ジェラルド・ブレナンは、フォードを最初の「イスパノフィロ」(スペイン通)と評価したが、いくぶん偏見にとらわれた面を指摘した。イギリスの貴族階級出身のフォードは政治的に根っからの保守主義者でプロテスタントだったため、その反カトリック的立場がスペイン理解を多少妨げ、スペイン(人)のオリエンタライズ側面が過度に誇張されているという。Brenan, Gerald, Prólogo a Ford, R., *op. cit.*, p. 7.
- (7) ジョージ・ボロウの『ジンカリースペインのジプシー』(1842年初版)は、スペインのジプシー研究にとっても貴重な資料であり、またフラメンコ研究にも有益な資料が含まれる。Borrow, George, *La Biblia en España*, Alianza Editorial, 1970; *Los Zincali (Los Gitanos de España)*, Madrid, Editorial Turner, 1979.
- (8) Alberich, J., *Del Tamesis al Guadalquivir. Antología de viajeros ingleses en la Sevilla del siglo XIX*, Universidad de Sevilla, 2000 (2 ed.), pp. 26-29.
- (9) Calvo Serraller, *op. cit.*, p. 139.
- (10) この最初の旅で、メリメはその後の人生に影響を及ぼす出来事があった。グラナダからマドリッド行の乗合馬車でデバ伯爵(1834年の兄の死去でモンティエーホ伯爵の称号を継ぐ)との出会いである。マドリッドの伯爵邸には、幼少の娘エウヘニアがいた。このエウヘニアは1853年に皇帝ナポレオン3世と結婚することになる。メリメは晩年、皇后ウージェニーの知遇で終身上院議員となった。伯爵夫人マヌエラは、マラガでアメリカ合衆国領事代行のスコットランド人を父にもち、アンダルシアのフォルクローアに精通する女性である。メリメの『カルメン』は、マヌエラ夫人が語った現実の出来事を下敷きをしているという。社交家の彼女は、マラガ出身のセラフィン・エステバネス・カルデロン(1830年代後半にカディス・セビーリャの県令を歴任し、民俗研究家)をメリメに紹介した。メリメをマドリッドの闘牛場や民衆的な街区に案内したのは、このエステバネス・カルデロンである。Decola, Jean, *La vida cotidiana en la España romántica (1833-1868)*, Barcelona, Ed. Argos Vergara, 1984, pp. 164-165; Hempel-Lipschetz,

Ilse, “Andalucía, De lo vivido a lo escrito, por tres románticos franceses: Francois-René de Chateaubriand, Prosper Mérimée y Théophile Gautier” , IAVR, pp. 69-123.

- (11) Hempel-Lipschetz, Ilse, *op. cit.*, pp. 78-80.
- (12) ゴーチェ、テオフィル『スペイン紀行』、18頁。
- (13) シュタイングレス、G.『そしてカルメンはパリに行ったーフラメンコ・ジャンルの芸術的誕生（1833-1865年）』（岡住正秀・山道太郎訳）彩流社、2014年、163-167頁。
- (14) ゴーチェ『スペイン紀行』、286-287頁。
- (15) Brinckmann, Joséphine, *Paseos por España (1849-1850)*, Ediciones Cátedra, Madrid, 2001.
- (16) Davillier, Charles, *Viaje por Andalucía. Ilustración sobre medera de Gustave Doré*, Editorial Renacimiento, 2009.
- (17) González Troyano, A., Introducción a *Viaje por Andalucía* de Davillier..., pp. 7-16.
- (18) Rodríguez Martínez, F., “El Paisaje de España y Andalucía en los viajeros románticos. El mito andaluz en la perspectiva geográfica actual”（グラナダ大学文学部教授ロドリゲス・マルティネスの提供。なおネット上で公開されている）
- (19) Ford, R., *Las cosas de España*, p. 13-14.
- (20) Gautier, Théophile, *op. cit.*, p. 118.
- (21) ゴーチェ、前掲書、140頁。
- (22) 同、213頁。
- (23) Bernal Rodríguez, M., *La Andalucía de los libros de viaje*,... p. 27.
- (24) *Ibid.*, p. 47.
- (25) *Ibid.*, P. 27.
- (26) López Ontiveros, A., *op. cit.*, pp. 27-28.
- (27) González Troyano, A., “Los viajeros románticos y la seducción “polimórfica” de Andalucía”, IAVR, pp. 13-20.

第3章

- (1) Calvo Serraller, *op. cit.*, p. 140.
- (2) Ford, R., *Las cosas de España*, p. 311.
- (3) Bernal Rodríguez, M., “La tierra más hermosa del mundo”, pp. 170-172.
- (4) Del Mar Serrano, M., “Viajes y viajeros por la España del siglo XIX”, *Cuadernos de Geografía Humana*, Núm. 98, septiembre de 1993. およびメリメ「スペイン便り」のなかの〈絞首刑の話〉（1830年11月15日付、『パリ評論』）『メリメ全集』第1巻、河出書房新社、1977年参照。

- (5) Davillier, C., *op. cit.*, p. 171.
- (6) Ford, R., *Manual para viajeros por Andalucía y lectores en casa*, Madrid, Ediciones Turner, 1988, p. 168.
- (7) ワシントン・アーヴィング、前掲書、267頁。
- (8) Alberich, J., *Del Tamesis al Guadalquivir.....*, p. 45.
- (9) *Imagen Romántica de España*, Catálogo Exposición Ministerio de Cultura, 1981, p. 13. Citado por Díaz López, *op. cit.*, p. 86.
- (10) サイド、E・W.『オリエントリズム』（板垣雄三・杉田英明・今沢紀子訳）平凡社、1986年、98-112頁参照。
- (11) ワシントン・アーヴィング、前掲書、120頁。
- (12) Del Campo, Alberto, y Cáceres, Rafael, *Historia cultural del flamenco*, Córdoba, Editorial Almuzara, 2013, pp. 316-318参照。なお、血の純潔については、関哲行・立石博高・中塚次郎編『スペイン史1』（世界歴史体系）山川出版社、2008年、190、256、322、370、373頁参照。
- (13) 具体的には、アンダルシア人の高慢ぶり、誇張、奇妙なアクセント、カスティーリャ語を正確に発音しないことから、その身振り・しぐさが滑稽に見える。Borrow, G., *Los Zincali.....*, p. 155; *Id.*, *La Biblia en España*, p. 523.
- (14) Zoido Naranjo, A., *La prisión general de los gitanos y los orígenes de lo flamenco*, Sevilla, 1999, pp. 101-109.
- (15) Caro Baroja, J., *Ensayo sobre la literatura de cordel*, Madrid, Editorial Istmo, 1990. Citado por Del Campo, Alberto, y Cáceres, Rafael, *op. cit.*, p. 317.
- (16) Bernal Rodríguez, M., *La Andalucía de los libros de viaje.....*, p. 26.
- (17) Ford, R., *Las cosas de España*, p. 311.
- (18) Bernal Rodríguez, M., “Tipología literarias de la Andalucía romántica”, IAVR, p. 118.
- (19) *Id.*, p. 119.
- (20) 18世紀後半から19世紀前半までの闘牛の歴史については、ベルナルが簡潔に説明している。Bernal Rodríguez, M., “Un territorio de marginados: Bandoleros, Contrabandistas, torreros y gitanos”, *Historia de Andalucía*, t. VII., pp. 191-197.
- (21) シュタイングレス、G. 前掲書、210-211頁。
- (22) ワシントン・アーヴィング、前掲書、第2巻、14-15頁。
- (23) ゴーチェ、前掲書、350-353頁参照。
- (24) Brinckmann, J., *op. cit.*, pp. 183.
- (25) Ford, R., *Las cosas de España*, p. 351.

- (26) *Id.*, p. 356.
- (27) ワシントン・アーヴィングは、セビーリャからグラナダまでの道中で宿泊した地方都市、たとえばアラアルやロハの旅籠で体験したフィエスタを記述している。そこで彼が見たのは、密輸業者の唄、山賊の唄から、マホが歌う二行連句の恋唄、ギターやカスタネットのリズム、民族衣裳のアンダルシア娘のファンダンゴ、あるいはマホやマハたちのボレロだった。ワシントン・アーヴィング、前掲書、34-36、60-63頁。ゴーチェは、ある夏の日の夜にベレス・デ・マラガに到着したとき、町のあちこちで歌声とギターの音が鳴り響く光景を目撃した。カチューチャ、ファンダンゴ、ハレオといった踊りを見た。ゴーチェ、前掲書、294頁。
- (28) Ford, R., *Las cosas de España*, p. 356
- (29) Brinckmann, J., *op. cit.*, p. 200.
- (30) ゴーチェ、前掲書、262頁。
- (31) Molina Fajardo, E., *El flamenco en Granada. Teoría de sus orígenes e historia*, Granada, Editorial Miguel Sánchez, 1974, p. 41.
- (32) Davillier, C., *op. cit.*, p. 128.
- (33) *Id.*, pp. 359-392. オルティス・ヌエボ「カフェ・カンタンテ—新聞はどう見たか」(塩見千加子訳)『集いと娯楽の近代スペイン—セビーリャのソシアビリテ空間』彩流社、2011年、229-256頁参照。
- (34) Davillier, C., *op. cit.*, pp. 347-350参照。
- (35) Suárez Sánchez, E., et al., *Viajeros francófonos en la Andalucía del Siglo XIX*, t. 1, p. 320.
- (36) *Id.*, pp. 351-357参照。
- (37) Bernal Rodríguez, M., “La tierra más hermosa del mundo”, pp. 165-176参照。

第4章

- (1) スペイン・ロマン主義の時代とその文化的諸相については、優れた本格的入門書が上梓された。立石博高編『概説近代スペイン文化史』ミネルヴァ書房、2015年、第2章「自由主義とロマン主義の時代」28-55頁参照
- (2) González Troyano, A., Introducción “Costumbrismo decimonónico” a Estébanez Calderón, S., *Escenas andaluzas*, Ediciones Cátedra, 1985, pp. 11-50; Marco, Joaquín, “El costumbrismo español como reacción”, IAVR, pp. 127-139.
- (3) Marco, Joaquín, *op. cit.*, p. 139.
- (4) Nuñez Ruiz, R., “Viajeros catalanes por Andalucía. La percepción de Andalucía y lo

- andaluz en la cultura catalana, *Cataluña y Andalucía en el siglo XIX* (Segundo Congreso de Historia Catalana-Andaluza. Relaciones económicas e intercambios culturales: L'Hospitalet, 1997), Barcelona, Aquí Multimedia, 1998, pp. 273-311.
- (5) Gómez Yebra, Antonio, Introducción a Fernán Caballero, *Genio e ingenio del pueblo andaluz*, Madrid, Editorial Catalia, 1994, pp. 24-25.
- (6) Marco, J., *op. cit.*, p. 139.
- (7) González Troyano, A., Introducción “Costumbrismo decimonónico”, p. 24. ゴンサレス・トゥロヤーノが指摘するように、ゴンサレス・デル・カスティーリョの多くの演劇作品には、たとえば「カディスの闘牛の日」「プエルトのお祭り」「勇敢なマハ」「詩人の医者」など多くあるが、それらは珍しい「マホ趣味」に接近するための格好の資料であり、民衆街区の事物の陳列棚であった。なお、ブルジョワ市民層が成長したカディスでは、外国趣味が採り入れられていたが、この場合、「マハ」は新たなブルジョワ権力を象徴する「ダンディー」に對置された。
- (8) Palazón, Antonio Reina, *La pintura costumbrista en Sevilla (1830-1870)*, Diputación de Sevilla, 2012 (2 ed.); Díaz López, J. A., *op. cit.*, p. 93.
- (9) Palazón, A. R., *op. cit.*, pp. 65-116.
- (10) *Ibid.*, p. 109.
- (11) Aranguren, José Luis, *Moral y sociedad*, Madrid, 1970. Citado por Palazón, A. R., *op. cit.*, p. 33.
- (12) Palazón, A. R., *op. cit.*, p.34.
- (13) Nuñez Ruiz, R., *op. cit.*, p. 276.
- (14) *Ibid.*, p. 275.
- (15) Martín Corrales, E., “Andaluces en la Cataluña del siglo XIX. De la lejana y exótica Andalucía a los incómodos vecinos andaluces”, *Cataluña y Andalucía en el siglo XIX* (Segundo Congreso de Historia Catalano-Andaluza. Relaciones económicas e intercambios culturales: L'Hospitalet, 1997), Barcelona, Ed. Aquí Mas Multimedia, 1997), 1998, pp. 315-336.
- (16) Nuñez Ruiz, R., *op. cit.*, p. 277.
- (17) Martín Corrales, E., *op. cit.*, pp. 321-322. マルティン・コラーレスは、次のような興味深い指摘をしている。19世紀初頭から、カタルーニャではジプシーの歌や踊りに関心が高く、ジプシーたちが劇場舞台にしばしば出演した。ジプシー女性のハレオやカチューチャは人気のレパートリーだった。一定数のジプシーがプロフェッショナル化し、カタルーニャのジプシーは、当時のジプシー趣味のもと、あるプロセスに巻き込まれていたとする。つまり、ジプシーたちはアン

ダルシアからもたらされた「フラメンコ」を自分たち独自のものとして取り込むのである。

- (18) Nuñez Ruiz, R., *op. cit.* 278.
- (19) *Ibid.*, pp. 282-283.
- (20) シュタイングレス、前掲書、102-203 頁参照。
- (21) Nuñez Ruiz, R., *op. cit.* p. 282.
- (22) *Ibid.*, pp. 274 y 285.

むすびにかえて

- (1) García Gómez, G., “El arte flamenco en las dos Españas”, Carmona, Alfonso (ed.), *El Flamenco en la cultura española*, Universidad de Murcia, 1999, pp. 11-26.
- (2) Pérez Garzón, J.S., *op. cit.*, p. 83.
- (3) セバスティアン・イラディエル・サラベリー（1809–1865年）は、バスク出身の音楽家。パリでも活動し、ウージェニーのために「ヘニールの真珠」（ヘニールはグラナダ街区南に流れる川）を作曲。パリ滞在中はウージェニーの音楽教師を務める。なお、彼が作曲した「ハバネーラ」はビゼーのオペラ「カルメン」に採り入れられた。
- (4) Caro Baroja, J., *Ensayo sobre la literatura de cordel*, Madrid, 1969, p. 203. Citado por Palazón, A. R., *op. cit.*, p. 53
- (5) Pérez Garzón, J.S., *op. cit.*, pp. 79-84.
- (6) Rivière Gómez, A., *Orientalismo y nacionalismo español. Estudios árabes y hebreros en la Universidad de Madrid (1843-1868)*, Madrid, Editorial Dykinson, 2000, pp. 39-89参照。
- (10) Gautier, Théophile, *Viaje a España*, Ediciones Cátedra, Madrid, 1998, p. 271.